
蒼紅の祓魔師 ~ 子孫と先祖の交差曲 ~

天空 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼紅の被魔師〜子孫と先祖の交差曲〜

【Nコード】

N4918X

【作者名】

天空 翼

【あらすじ】

さすがにこれで今のところの連載は終わりにします。これ以上は抱え切れませんので。てわけで蒼紅の被魔師〜子孫と先祖の交差曲〜が始まります！

プロローグ 初めまして！ご先祖様！

「蒼の旦那は運命って信じる？」

「初めまして！ご先祖様！」

「信じるかってーの。寝言は寝て言えバーカ。」

俺の名前は伊達だて蒼護そうご。

エクソシストになるためにこの被魔塾に通う15歳の現役中学生。普段は中学に通ってて学校が終わったらこの被魔塾に来ている。

……と言うのは表向き。被魔塾生ってのは表面。本当は俺、フリーのエクソシストだ。

結構エクソシスト達の間で有名になっちゃったので表向き、被魔塾生ってことになってる。

え？上の連中？俺が脅s…ゲフンゲフン！お願いして認めてもらった。

ちなみに要らないかもしれないけどあの戦国武将、伊達政宗の子孫でもある。

「うっわ酷い！俺様泣いちゃうかも！」

このオチャラケ頭お花畑男は猿飛疾風。さるとび はやて

俺と同じように被魔塾に通う中学でのクラスメイトであり幼馴染。

あの真田十勇士の猿飛佐助の子孫であり…悪魔の血を5分の1受け継いでいる混血クォーターである。

俺と同じようにフリーのエクソシストと言うわけではないがこいつの情報収集やハッキング能力は恐ろしいほど役立つので時々協力してもらってる。

「あ、さては今すつごい失礼なこと考えてたでしょう?」

「うん。考えてた。」

「あれ!? 肯定しないの!？」

「す、すまない疾風!俺はお前のことをオチャラケ頭お花畑男と考えてしまっていた!!」

「紅の旦那酷い!!」

この見事に俺ははぐらかしたのに自分は本当のことを言っているアホは真田紅雅。さなだ こうが

佐助と同じように被魔塾に通う中学でのクラスメイトで俺の幼馴染。こいつは俺とタッグでフリーのエクソシストをやっている相棒で真田幸村の子孫である。

「でもそれってあなたが間違ってるんじゃないと思うんだけど?」

こいつは奥村燐。おくむら りん

同じように被魔師を目指す俺の親友でサタンの烙印と呼ばれる所謂

サタンの息子である。

「隣の旦那までええええ!!!」

えぐえぐと泣き真似する疾風。

何と言うか、俺と隣はジト目でそんな疾風を見て紅雅はオロオロとしている。

カオスだ。間違いなくカオスだ。きっと普通の人ならそう思うだろう。

けど残念ながら俺らは普通じゃないのだ。

そして俺達はいつもの通り塾での授業が終わると今度のテストのために俺と紅雅の家に泊まっつての勉強合宿をすることになった。

俺は走って自分と紅雅の家に先に帰っていった。

マンション・表玄関

聖十字学園町にある20階建ての高層ビルマンション。

その最上階に俺と紅雅は住んでいる。

カードキーをスラッシュ！で中に入れる。

6時までの受付のお姉さんを横目に俺はエレベーターに駆け乗る。そして20階へのボタンを押した。

ウィーンとエレベーターが上に上がっていく。

「…」

こんな広いエレベーターに1人は辛いなやっぱ。

「…ハア。」

思えば1人になるのが苦痛に感じるようになったのって…あの日からだよなあ。

いや、あの日から俺はエクソシストになることを決めたんだ。

俺は両手で両頬をパンツと叩くと小さくガッツポーズをして気合を入れた。

「shit！しっかりしろ俺！笑顔笑顔！あいつらが帰ってきたときにしよげた顔してちゃ心配させちまうからな！」

俺は家：マンションだから部屋？の前に来るとカードキーを再びスラッシュ！そしてさらに暗証番号を入力した。
カギが開く。

「ただいまーって言っても誰もいないんだけどな…」

俺は靴を脱ぐとトタトタと早歩きしてリビングへの扉を開けた。

「ふう、疲れた〜って…え？」

広いリビングには俺しかいない。はずなんだけどなあ…何だろ？
武装したColorfulな人達がいいますが？

青、赤、迷彩、茶色、黄色、緑、紫…ワア才見事にバラツバラな色
合いですこと…

さて、ここで俺の頭の中に3つの選択肢が浮かび上がりました！。

逃げる

バトル！

警察に通報

逃げるは…ダメだ。戦闘になったら今の俺には仕込みナイフ1本と対悪魔用拳銃しかねえ…

じゃあバトル？これも戦闘になったら（略

じゃあ通報？これも戦七（略

チキショー俺の選択肢は全て潰されたと言っのかつ！！

「…」

俺は第4の選択。シカトを選んだ。

「ヤツバ、俺疲れてんのかな？どーでもいいや冷蔵庫に食料入れんと。アイスが溶けちまう。」

俺はいそいそと冷蔵庫に買ってきた荷物を仕舞い始める。

仕舞い終えたら…って、こっち見てるよ。

次は風呂掃除か。今日は紅雅がやる日なんだけど今はとにかくこの状態から抜け出す方法を…！

「ちょおつといいかなあ？」

殺気！？

俺はとつさに仕込みナイフを袖から取り出し拳銃を殺気のしたほうに向ける。

「っ!？」

拳銃は迷彩の人の額に当たり、ナイフは迷彩の人の持っていたクナイ?とカキンツと音をたてて交わった。

「へえ…やるね君。やっぱり忍？」

「て、手を上げて降参の合図をして。俺も離すからさ。」

「でも、忍は簡単に人を信じないよ？」

「それなら良い。俺がアンタの頭ブチ抜くだけだ…」

忍と名乗る人がアハ〜とヘラヘラした笑いを見せ武器を下ろす。そして手を上げた。

「す、素直ですね妙に…」

「勝負は目に見えてるからね。そっちにしても死んじゃうよ。」

この人は俺が約束を破るとでも思っているのだろうか？

俺も武器を下ろして少し離れた場所に置きその場に戻ってきた。

「え？何で撃たないのさ？」

「俺、人殺しはしたくないからね。いや、傷つけたくもないから。だから下ろした。you see？」

「い、今のは!？」

紫さん（めんどろだし名前わかんねえからこれでいっか！）が声を上げる。

「君、南蛮語話せるの？」

忍の人が聞く。

「南蛮？南蛮南蛮南蛮………ああ、外国のことか。」

「ーか随分古い言葉使うな。」

あれ？青さんと赤さんに忍の人…何かどっかで見たことあるよおな…

「それにしてもお前、俺にそっくりだな。」

青さんの言葉で納得。

誰に似てるか…ついたら俺にそっくりだったんだな。

「あ！赤さんは紅雅にそっくりなんだ！」

「あ、赤さん？」

「俺、名前知らないし。」

「そつでござつたな！某は真田幸村でござる！」

真田幸村さんかあ…よし覚えたって、え？

「俺は佐助だよ」

「俺は長曾我部元親だ！！」

プロローグ 初めまして！ご先祖様！（後書き）

あらすじに書いてあるとおりこの小説でいったん新たな連載は止めます。

どれかが完結したら新たに書きます。

あああああ！?!?!?!」

うん。同じ反応アザース。

「つてえ？じゃあこの人なに？俺の先祖？」

「疾風、そつだよ猿飛佐助だよアンタの先祖だよ。うぜえんだよ。」

「さりげなく罵倒した!?!」

俺はとりあえず罵倒しておきました。

哀れ？ハハツ、何それ食えんの？

「す、凄いでござる！某のご先祖でござる!?!」

「紅の旦那、口調！口調戻っちゃってる!」

「つ！す、すまない!?!」

昔こいつは口調のことで虐められたことがある。

まあ俺がボコしたけど

それにしても未来の自分を見てるかのように似てるなあ…

「Ahー、とりあえずこの世界の常識を教えるんで適当に座っててくれ。」

俺が言つと疾風が突っ込んだ。

「おまつ!?!?!ご先祖になんて口聞いてんの!?!」

「諦める疾風。蒼護の口の悪さは生まれつきだ。」

「夕飯抜きにすつぞてめえ。」

俺はそれだけは嫌あああああ！！！と頭を抱える馬鹿はほつて…

全員がソファーや椅子に座ってる。

「うおお！ふかふかでございますー！！」

ソファーに座った幸村さんがそう感激の声を上げる。

「ソファー気に入ってくれたか。よかったよかった。さてと。」

俺はお茶を配った。

「新茶だから美味いぜ。」

「だあかあああ、蒼の旦那ご先祖様になんて口聞いてんの！？」

「はい疾風も飯抜きー。」

「ハアアア！？ちよ、理不尽だあああ！！！」

疾風も頭を抱え込んだ。

「つと、まずは自己紹介だな。こっちは真田紅雅。で、現在進行中で頭抱えてるのが猿飛疾風。俺の幼馴染で幸村さんと佐助さんの子孫な。」

「俺様の子孫ねえ…」

「しかも俺様までにならずにご先祖様にまで口悪い！どんな性格してんの本当に！！」

「うつせえよ、マジで飯抜きにすつぞてめえ…！」

俺はキレかけている。

理由？ここ最近エクソシストの仕事が続いてるからだボケ！

「それだけは勘弁して！」

「俺のこと忘れてるよな！？」

「」「ああ、そういえば。」「」

俺と紅雅、疾風は頷きながら言う。

黄色さんは不貞腐れた。

「ちくしょおおおお！！どうせ俺は影が薄いですよ！！」

何だこの人メンドクセエ…

「今、ちゃんと聞こえてたよ！」

「チツ…！」

「ま、まあまあ。彼方の名前は？」

紅雅が聞く。

「俺は前田慶次！ありがとう幸村の子孫君！」

「うむ！」

「で、皆さんどうするの？」

俺と紅雅は疾風の言葉に固まった。

「そーいえば……」

「……………よし、家泊まれ！」

「ハアアアアア！？！？」「」

俺が言うと紅雅と疾風が声を上げる。

「いやいや、家狭いだろ！？」

「いやいや、旦那達の家つてこの階全てだろ！？広すぎだろうが！」

「でも城で住んでる人達には狭いかと！」

紅雅、疾風、また紅雅の順番で言う。

「雨風凌げる場所に飯食える。これだけ条件が揃ってれば俺は言うことないぜ！」

「元親もこー言ってるしさ！いいだろ？」

「!!」

疾風が地面に頭を打ち付けて嘆いている。

「さて…馬鹿はほつといて、紅雅。さっきの言葉撤回する?」

「するするする!撤回するぞ!」

紅雅が小さく跳ねながら言う。
尻尾と耳が見えるぞ…

「あれ?俺様の撤回権は?」

「紅雅許す!あ、そろそろ時間だな。」

「ねえ、聞いてる!?!」

「そうだな。そろそろ現場に行かねばな。」

「準備は万端にしておけよ。何せ幽霊列車^{フアントムトレイン}1体に屍^{グール}3体が相手だ。」

「承知している。」

俺達はそれぞれの部屋へと駆け込む。

あ、そうだ!

「疾風、さっきの嘘。許すから、戦闘案内頼んだぜ。」
バトルナビゲート

「良かった!今日の案内休もうか?」それだけはするな!頼ってる
だから!」りよーかい!」

俺は愛用の6本の刀のうち1本を持ち対悪魔用拳銃の聖弾丸もチエツクする。

「ふぁんとむとれいん？ぐる？何だそれは？」

リビングに戻ると小十郎が疾風に聞いている。

「俺達はエクソシスト…悪魔祓いをしてるんだ。悪魔つてのは、そつちで言う妖怪的な感じだ。」

「つまり…蒼と紅は妖を祓っているのか。」

元就さん、蒼と紅って俺と紅雅のことですか？

「まあそんな感じかな。ちなみに俺様はまだ候補生エクスワイヤ…見習いだよ。でも、プロ…一人前の2人が俺様を頼ってくれてるんだから頑張らなきゃね。」

「HA！当たったり前だる疾風！」

俺は疾風の背中をバシんと叩く。

「俺らは幼馴染！お前ほど信頼できる戦闘案内人バトルナビゲーターはいないぜ！それを抜いてもお前は優秀だしな！」

「そつだぞ疾風、自身を持って！」

紅雅も準備を終えたよう部屋から出てくる。

「アハ、2人ともありがと。後痛いよ。」

「あつとs o r r y!」

「す、すまぬ。」

飯は帰ってきてからだな。

「おし、行くぞ!」

「うむ!行ってくるぞ佐助!」

「はいはい、行ってらっしゃい。」

そして俺と紅雅は悪魔の出るといふ駅に向かった。

「さて、お2人の案内ナビゲートでもしますかね」

俺はパソコンを起動する。

「そりゃ何のチカラだ？」

元親お兄さんが聞いてくる。

「ああ、パソコンだよ。いろんな情報を調べられるんだ。他にもいろいろなことができる。壊すなよ、2人の『命』がかかってるんだ。」

俺が言うと全員に緊張が走る。

「エクソシストはとても危険な仕事でもある。いや、エクソシストは常に命を懸けて戦ってるんだ。人々を悪魔の手から守るために。彼ら2人が無事に戦い抜いてくるように案内^{ナビ}：案内するのが俺様の仕事さ。」

俺は監視カメラの映像を写す。

「静かにしててね。じゃなきゃ、彼ら死ぬかもしれない。」

全員が沈黙し後ろから画面を見つめる。

駅員さんに2人が挨拶している。

『よろしくお願いします。』

『できる限り頑張らせていただきます。では、皆さんは言ったとおり。』

駅はいつもと違い人がいない。

駅員さん達が人払いをしたんだ。そして今の時間帯は人がいない。

『さて、疾風！』

「あいよー！」

『準備は俺達でやるから悪魔が来るかどうか見張っとして。』

「了解しました〜」

今回も無事に帰ってきてくれよ2人とも！

俺達はペットボトルに入れた聖水を幽霊列車ファントムトレインの出て行く方向の線路に撒く。

満遍なく撒いたらキャップを空けたペットボトルを2つずつ両方に、幽霊列車ファントムトレインの入ってくる線路の方向に置く。

このペットボトルにはちよつとした仕掛けがしてあって幽霊列車ファントムトレインがここを通過するとペットボトルの中の水が線路に撒かれて幽霊列車ファントムトレインの速度が落ちるというトラップだ。

「これで後は…紅雅！」

「承知した！」

紅雅は魔法陣の描かれた紙の上に針で指差して出した血を垂らす。

「死と死の狭間を守りし番犬よ、今ここにその姿を示せ！」

そう唱えると悪魔、ナベリウス屍番犬が姿を現す。

見ての通りこいつは手騎士テイマーの称号マイスターを持っている。

他には詠唱騎士アリアの称号マイスターを持っている。

俺は騎士ナイトと竜騎士ドラグーンの称号マイスターを持っている。

「さて、悪魔狩りと行きますか！」

第一幕 被魔師（エクソシスト）（後書き）

今回は悪魔とのバトル！そして燐は再登場、雪男は初登場！

ファントムトレイン
幽霊列車の扉が開き屍^{グール}3体が出てくる。いや、あれは5体！？
まあ、予想はしてたけどさあ…
まっ、屍^{グール}のほうは頼んだぜ紅雅…！
俺は刀を持つと完全に停止した幽霊列車^{ファントムトレイン}に向かっていった。

俺の召喚した屍番犬^{グール}が屍^{グール}2体を襲っている。
しかし、こつちに3体来ていた。
俺はもう一体の屍番犬を呼び出す。

「それでも2体来たか…」

”心を騒がすな
神を信じまた我を信ぜよ

汝、汝らを導きて真理をことごとく悟らしめん

彼己より語るにあらず”

見ると蒼護は幽霊列車ファンタムトレインの瞳に聖弾を打ち込んでいた。
何を心配してるんだ俺は！蒼護の腕はよく知っているだろう！

”凡そ聞くところの事悟らしめれ

…これ彼が如何なる死にて神の栄光を示し言い給いしなり

またこれを録し者…この弟子なり…！

我等はその証の真なるを知る…！

我、思うに世界も、その録すところのふみに載するに耐えざらんっ
！！！！”

屍ゲイルが消え去った。

他の屍も屍番犬ゲイルに体を食いちぎられ絶命している。

”よし、次は…！”

俺は屍番犬2体を幽霊列車ファンタムトレインに体当たりさせる。

「ただいまー。」

俺達は悪魔を退治した後、家に超特急で戻ってきた。
俺はまだ体力の残っていた紅雅に引っ張ってもらったけどな

「お帰りお2人さん。無事でよかったよ……」

疾風が俺達のことを優しい瞳で見つめる。

「うわキモッ！」

俺は紅雅の後ろに隠れた。

「えええ！?!?!?!?そりゃ酷いよ蒼の旦那〜!」

「いや本当のことだし。なあ紅雅?」

「え?いや、俺は…スマン疾風。ハッキリ言うと俺も気持ち悪い。」

紅雅がススツと後ろに下がる。

「ちょ、引かないでよ紅の旦那ー!」

「無理…」

「グスン…ご飯出来てるし、燐の旦那に雪の旦那来てるからね…」

そして奥のほうから、

「うわああああ燐の旦那ああああ!!!」

という泣き声が聞こえてきたが無視した。

リビングに入ると大きなテーブルを10人が囲んでいた。
俺達もその中に入る。

今日はモツ鍋だ。

「燐、雪男センサーいらっしやーい。」

「お邪魔してますよ蒼護君、紅雅君。」

「邪魔してるぜー。あ、2人ともあんまり疾風をイジめるなよ。」

「「イジめてない！」」

疾風は一瞬こつちを見るとニヤリと笑った。

「てめえ…！」

「ストップだぞ蒼護。ご先祖様たちも待ってるしな。」

俺は疾風に掴みかかろうとするが紅雅に抑えられ大人しく座った。

「「「いただきまーす。」」」

俺達が手を合わせてそう言つと武将たちも戸惑いながらいただきましたと言つた。

そーいやまだ戦国時代にはいただきますの習慣はなかったな…

「美味でござるー！」

「これ燐の旦那が作ったんだよ〜」

幸村の言葉に疾風は言つ。

「そつか、相変わらず料理の腕はプロ級だな。」

蒼護は微笑んで燐に言つ。

「お、おう…／＼／＼でも、蒼護のほつが料理の腕いいじゃねえか！」

「NO、俺は燐のほつが美味しいと思つぜ。」

「誰でも自分以外の方が作った手料理の方が美味しく感じるものだ。」

紅雅がそう言う。

「そうだよな、そういうもんだな。」

蒼護は早々に食事を終わると自分の部屋に入ってしまった。

「蒼護は小食なんだな。」

慶次はそう言う。

「現代じゃそんなには食べないんですよ。だけど…たしかに今日の蒼護君はいつにも増して小食でしたね…」

((もしかして…!!))

紅雅と疾風の顔が青くなる。

「疾風、すぐに薬の用意だ!」

「ラジャー! 紅の旦那は蒼の旦那押さえつけといて!」

「薬に押さえつけるってまさか、今日は…!!」

慌ただしく蒼護の部屋に行く2人を見て奥村兄弟も顔を見合わせる。

「白き炎の月…」

「何かあったのかよ?」

元親が不思議そうに聞く。

「ああ…。今日は蒼護の呪危じゆきと呼ばれたある悪魔の付けた傷が瘴気を放ち彼を悪魔落ち…悪魔にさせようと体を蝕む日なんです。」

雪男は答えた。

「人間が悪魔になるのか？」

「とっても稀なんですけどね…。人間が悪魔になることを悪魔落ちと言っんです。蒼護君がエクソシストを続けているのは昔彼がその悪魔に家族を…」

雪男は元就の質問に答えてそこで言葉を止める。

「薬でなんとか悪魔化の進行を押さえつけてるけど、日に日にアイツの悪魔化は進行を早めてて…前は初めは1年に1度程度だったらしいんだけど今じゃ…週3回は必ず起こるようになってる…」

隣の深刻そうな言葉にその場も落ち込んだ分陰気に飲まれる。そして数分後、リビングに紅雅と疾風が現れた。

「落ち着いたよ…」

疾風の言葉に全員がホッとすると小十郎が何かに気づく。

「おい、紅雅。てめえその顔は…」

紅雅の頬には引つかき傷ができており血が出ていた。

「大丈夫だ。薬を投与するために痛みを抑えようと暴れる蒼護を取り押さえなければならぬのだが…この日は必ず少しだけ悪魔の姿になるんだ。なるというても爪が人間より鋭くなったり牙が生えたりするだけだが…」

「うん。俺様、この前は噛まれちゃったよ二の腕を牙でブスツとね」

疾風はそう言いながら二の腕を見せる。

そこには痛々しい傷跡が…

「皆、疲れちゃっただろうし今日は寝よう！てわけでご先祖様達は部屋に案内するね。あ、燐の旦那と雪男の旦那は別の部屋ね。」

疾風に案内され全員は部屋のベッドに入る。

皆が眠りにつく中、政宗だけは自分の子孫が危ないと知って中々、寝るに寝付けずにいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4918x/>

蒼紅の祓魔師～子孫と先祖の交差曲～

2011年11月21日22時40分発行